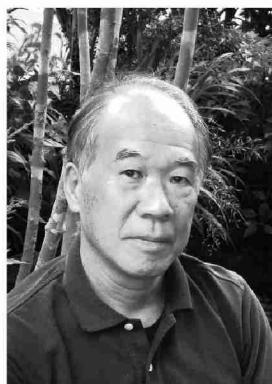


## 特別寄稿

### 豊道春海と日本芸術院

栃木県書道連盟副会長

大浦舟人



大浦舟人氏

文化庁の特別機関である日本芸術院（高階秀爾院長・会員定数百二十名）は、明治四十年（一九〇七）の創立以来、数度の改組改革を経て現在に至っている。なお抱える積年の課題がいわゆる会員の定数と構成、そして選考方法の問題である。

これを承け、文部科学省において「日本芸術院の会員選挙に関する検討会議」が五回にわたって開催。会員候補者の推薦にあたっては会員に外部有識者を加えて審議する、定数は変えずに配分を変える、日本画と洋画を絵画としてまとめる、第二部にマンガ、第三部に映画を加えるなどの「日本芸術院改革の方向性（とりまとめ案）」が修正なしで了承されている。

これに対し、他の芸術院会員三名とともにオブザーバーで出席していた高階院長からは「今回の『とりまとめ』をしつかりと受け止め、今年度（令和三年度）の会員選考に反映できるよう、早速、具体的な対応を検討する」とした。院長が委員ではなくオブザーバーでの出席ということ、しかも念を押すように院会員を三名同席させたということは、日本芸術院側に任せて五五年を経た令和二年十一月、折しも

その際、萩生田文科大臣（当時）から、日本芸術院には時代に即しより広い視野で検討する必要性があることを改めて言明している。

同年はそれまで十三回続いた日展を改組した第一回社団法人新日展がスタートしたばかり。しかし、実質的に日展の運営母体であつた日本芸術院において書科（第五科）の意見を反映させるための環境は極めて脆弱であった。この状況に対し、この時の翁は書科のみではなく、院全体で百三十から百五十への増員を目指して運動を進めたのである。

ちなみに、増員の要望はそれまでにも院内で何度か出るもの、その都度、「必要な時期に検討する」との院長の対応が続いていた。

翁の熱意は、丹羽海鶴の門下にいた元官僚の斡旋もあって衆参両院の文教委員長を動かし、昭和三十四年四月、ついには文部省の局長、そして当時の松田大臣をも動かして衆参両院への請願を採択させ、定数は三十名程度の増員が可能との言質に加え、

とを意味するのではないだろうか。さて、この一連の流れは、時を遡り野党議員から再び日本芸術院についての指摘が出され、衆議院文部科学委員会はこの問題に關して審議を実施。

予算措置の一歩手前の段階にまで牽引したのである。これは余人をもつて容易なことではない。

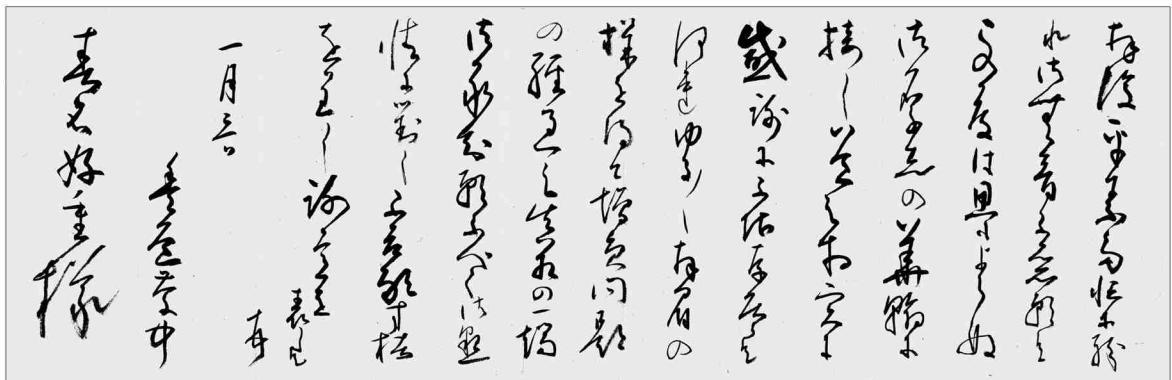
同年十月、松田大臣、局長、文教委員長との四者会談にて高橋院長にこのことが伝えられる。

しかし、その間にも当時の院長の思惑が自身の志とは裏腹であることを悟つた翁が不吉な予感を抱く中、同年十一月の日本芸術院総会において、

翁の功績が、定数の不均衡と多數決の原理に縛られた筋道論にすり替えられた末、孤立無援に陥つた翁の増員案はあつさりと否決されたのである。

翁にとって運が悪かったのは、院主流派を刺激する文書が事前に流れしたこと、書の欠員に補填されたS氏に絡む問題などがマイナスに作用したことである。その時、書の会員は翁以外になく、唯一の理解者であつた彫塑の朝倉文夫氏は欠席であった。

昭和三十五年三月九日の第三十四回国会衆議院文教委員会の議事録を参照すると、文部省側が増員問題について積極的で、そのための三十六年度からの予算措置も可能であるとしているにもかかわらず、すでに院長在任が十年をこえていた高橋氏の頑な迄の消極姿勢と、院長が闇わらうとした計画、つまり翁が労苦を尽くしかつた計画、つまり翁が労苦を尽くして所管である文部省の協力を取り付



豊道春海翁 春名好重宛書翰 文面 (20 × 71cm) 昭和 35 年 1 月 83 歳

けた増員計画を潰すことを第一義としていることが否応なしに伝わつてくるのである。

院長の口からは「増員に反対ではない」といった側から、「過ぎる」「慎重を期さなければならない」「もう少し時期を待つて」「まず部内で」「全体が盛り上がってくるのを待ちたい」などが間髪を入れず羅列するのである。

得て増員問題／の経過之真相の一  
ご承知願ふべくご懇／情に對し不<sup>ト</sup>  
寸楮／を呈し謝意を表し候／頓首  
一月三日／豊道慶中／春名好重様

その功績を顕彰することを忘れてはならないことである。

- ・「第三十四回国会衆議院文教委員会 第五号議事録」昭和三十五年三月九日
  - ・「日本芸術院令の一部を改正する政令」昭和三十六年第十巻政令第一七一号
  - ・「藝術新潮」昭和三十五年二月号
  - ・「豊道春海」栃木県立美術館 一九八一年
  - ・「美術手帳」集英社二〇二二年二月一日

**大浦舟人** おおうら・ふなど  
昭和二十九年東京生。本名舟人  
下野書道会理事、下野の書展大會  
書道連盟副会長、県芸術祭審査委員  
篆刻研究院主宰。栃木県文化獎  
シ : <https://kanseiirou.com>

昭和二十九年東京生。本名舟人、号星齋。  
下野書道会理事、下野の書展代表作家、栃木県  
書道連盟副会長、県芸術祭審査員、観星樓書道  
篆刻研究院主宰。栃木県文化奨励賞。ホームページ：  
ジ：<https://kanseirou.com>

（一〇〇四）宛に認めた書簡をここにご紹介したい。

卷之三

氏は東京帝国大学文学部国文学科

卒業、日本書道史とりわけ古筆の研究家として知られ、「古筆大辞典」

(一九七九年／淡交社)などの著書がある。この時、氏は四十九歳、かたや

翁は八十三歳である。政治的意図とは無縁で、書道家として幾つもの遺稿を残す。

無縫は書道文化は拡げる讀者たちへ少長に関わりなく自身の志を伝えよ

うとしていた眞の翁を知る貴重な資料といえないだろうか。